




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2825 号	氏名	井上 博人
審査担当者	主 査	鹿毛 政義	
	副主査	中島 収	
	副主査	安藤 尊思	
主論文題目： Long Term Results of Balloon-Occluded Retrograde Transvenous Obliteration for Portosystemic Shunt Encephalopathy in Patients with Liver Cirrhosis and Portal Hypertension (肝硬変症、門脈圧亢進症患者のシャント脳症における B-RTO 後の長期的予後)			

審査結果の要旨 (意見)

バルーン下逆行性経静脈的塞栓術 (B-RTO) は、脾腎シャントに起因する胃静脈瘤ならびにシャント脳症に対して有効な治療法である。ただし、シャント脳症に関する長期の治療効果について十分に解明されていない。本研究は、B-RTO を行なった 19 例を対象に、長期に亘る経過観察を行ない、シャント脳症が塞栓後速やかに改善し、かつ、その効果が長期間持続することを明らかにした。さらに、長期予後に影響を与える因子として、治療前の肝予備能と肝癌合併が重要であることも明示した。SRS を有する慢性肝疾患症例に対して、肝予備能が良好な早い時期に B-RTO を行う意義を示した本研究は、臨床的に価値あると判断する。

論文要旨

Splenorenal shunt (SRS) を原因とする門脈大循環シャント脳症に対し balloon-occluded retrograde transvenous obliteration (B-RTO) で治療を受けた患者の長期治療効果を肝予備能と生命予後から検討した。B-RTO を行なった 19 例全例でシャント塞栓閉鎖後に脳症は改善した。治療 3 年後も Child-Pugh score で表す肝機能、Albumin, 血中アンモニアは有意に改善し肝機能増悪の抑制効果もみられた ($p < 0.01$)。観察期間中に 3 例が肝不全で 2 例が肝癌で死亡した。治療前の Albumin 値が 2.8mg/dL 未満の群は予後不良であった ($p < 0.05$)。即ちシャント脳症に B-RTO 治療は著効するが、長期予後は治療前の肝予備能と肝癌合併の影響をうけていた。依って SRS が存在すれば肝予備能良好な早期に B-RTO を行う重要性が示唆された。